

ウィキペディア

イリオス

出典: フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』



この記事は検証可能な参考文献や出典が全く示されていないか、不十分です。

出典を追加して記事の信頼性向上にご協力ください。（2014年6月）

イリオス（古代ギリシア語イオニア方言形：Ἰλιος, Īlios イーリオス）は、ギリシア神話に登場する都市。**イリオ****ン**（イオニア方言形：Ἴλιον, Īlion イーリオン）、**トロイ****ア**（アッティカ方言形：Τροία, Troia トロイア、イオニア方言形：Τροίη, Troiē トロイエー、ドーリス方言形：Τρωία, Trōia トローイア）、**トロイ**（英語：Troy）、**トロイ****ア****ー**（古典ラテン語：Troja トロイヤ）などとも呼ばれる。現在のトルコ北西部、ダーダネルス海峡以南（同海峡の東側、アジア側、トルコ語ではトウルヴァ）にあったとされる。遺跡の入り口には、有名な「トロイの木馬」の複製が建てられている。



イリオス（トロイ）のものとされる遺跡。城郭都市（紀元前12世紀）

一般に、ハインリヒ・シュリーマンによって発掘された遺跡がイリオスに比定されている。神話ではかなりの規模を持った都市国家であるが、現在発掘によって確認される遺跡は城塞以上のものではない。ギリシア神話においては、アガメムノーンを頭とするアカイア軍に滅ぼされたとされ、そのあらましはホメロスの『イーリアス』をはじめとする叙事詩環に描かれている。

トロイの古代遺跡については、イリオス遺跡を参照のこと。

目次

伝説上のイリオス

- イリオスの建設
- アポロンとポセイドンによる城壁の建築
- ヘーラクレースによるイリオス攻め
- トロイア戦争

イリオス遺跡

- シュリーマンによる発掘
- イリオス遺跡の構成
- ヒッタイトの記録によるイリオスとトロイア
- 20世紀の発掘調査

世界遺産**登録基準****脚注****参考文献****関連項目**

伝説上のイリオス

イリオスの建設

かつてイリオスのある地域は、スカマンドロス河とニュンペーのイダイアの子であるテウクロス（テラモーンの子テウクロスとは別）が王として治めており、テウクロイと呼ばれていた。そこへアトラースの娘エーレクトラーにゼウスが生ませた子であるダルダノスがサモトラケ島からやってきた。ダルダノスはテウクロスの客となり、彼の娘バティエイアと領地の一部をもらった。彼はそこにダルダノスという都市を築き、テウクロス王の死後、テウクロイの一带はダルダニアと呼ばれるようになった。

ダルダノスの後はエリクトニオスが相続した。エリクトニオスの後はトロースが継いだ。トロースは、自分の名にちなんでダルダニアの地をトロイアと呼ぶことにした。

トロースはスカマンドロス河の娘カリロエーと結婚し、クレオパトラ（プトレマイオス朝の女王クレオパトラ7世とは別人）、イーロス、アッサラコス、ガニメーデースをもうけた。ガニメーデースが気に入ったゼウスは、鷲に変身してガニメーデースをさらい、オリュンポスの給仕係とした。そして、その代償に馬を与えた。なお、アッサラコスの子がカピュスで、カピュスの子がアンキーセース。アンキーセースの子がローマの元となった都市を築いた英雄アイネイアースである。

トロースの子イーロスはプリュギアで、その地の王が主催した競技会の相撲の部に優勝。賞品として50人の少年と50人の少女を得た。また王は彼に斑の牛をあたえ、「その牛が横になったところに都市を築け」という神託が下ったから、その通りにしなさい」といった。イーロスが牛の後についていくと、牛はアテという丘で横になった。そこでイーロスはそこに都市を築き、**イリオス**と名づけた。イーロスはアドラーストス（テーバイ攻めの七将の一人のアドラーストスとは別人）の娘エウリュディケと結婚し、ラーオメドーンをもうけた。イーロスの後はラーオメドーンが継いだ。ラーオメドーンの子供には、娘のヘーシオネー、息子ティートノス、ポダルケースなどが生まれたという。

アポロンとポセイドンによる城壁の建築



トロイでプリアモスの宝



テトラドラクマとアテーナー（紀元前165-150）

あるときアポローンとポセイドンはゼウスに対する反乱をくわだてた。このためゼウスの怒りを買ひ、人間の姿に身をやつし、イリオス王ラーオメドーンのためにイリオスの城壁を築くという罰を受けた（一説によると、城壁を築いたのはポセイドンだけで、アポローンは羊飼いの役目をしていたという）。城壁完成の後にアポローンとポセイドンが報酬を貰おうとすると、ラーオメドーンはそれを拒絶した。アポローンとポセイドンは怒り、アポローンは疫病で、ポセイドンは海の怪物でイリオスを悩ませた。

その後、怪物にラーオメドーンの娘ヘーシオネーをささげれば、災いから逃れることができるという神託が下った。そこで、海から来る怪物に見えるように、海岸近くの岩にヘーシオネーを縛り付けた。それを見たヘーラクレスは、ガニュメデースの代償にゼウスが与えた馬をくれるなら、怪物を倒してヘーシオネーを救おうと申し出た。ラーオメドーンが請合ったので、ヘーラクレスは怪物を倒してヘーシオネーを救った。ヘーラクレスが報酬の馬を貰おうとすると、ラーオメドーンは拒絶した。ヘーラクレスは、いずれイリオスを攻め落としに来るぞ、と捨て台詞を残して去っていった。

ヘーラクレスによるイリオス攻め

ヘーラクレスは参加者を募ってイリオス攻めを行った。18艘の船による軍勢の中にはペーレウス（アキレウスの父）やテラモーン（大アイアース、テウクロスの父）もいた。軍勢は船をおりてイリオスを目指した。イリオス王ラーオメドーンはヘーラクレスらの留守に船を襲ったが、逆にヘーラクレスたちに包囲され、捕虜となった。

ヘーラクレスたちはイリオスを包囲し、テラモーンがイリオスへの一番乗りを果たした。ヘーラクレスは自分よりも優れた者の存在が許せなかったので、テラモーンを殺そうとした。テラモーンは機転をきかせて石を集めるふりをした。不思議に思ったヘーラクレスがテラモーンに尋ねると、テラモーンは勝者ヘーラクレスにささげる祭壇を築いているのだ、といった。ヘーラクレスは喜び、ラーオメドーンの娘ヘーシオネーを彼に与えた。

戦いの後、ヘーラクレスはヘーシオネーに捕虜のうちから一人だけ連れて行くことを許した。ヘーシオネーはラーオメドーンの息子ポダルケースを選んだ。ヘーラクレスがポダルケースの購いを求めると、ヘーシオネーは代償としてベールを差し出した。このことから、ポダルケースはプリアモス（ギリシャ語の「買う」はプリアマイ）と呼ばれることとなった。この時ポダルケース以外のラーオメドーンの息子はすべて殺された。

トロイア戦争

詳細は「[トロイア戦争](#)」を参照

イリオスは、プリアモス王の時にギリシア勢に攻め込まれ、滅亡することとなった。

この戦争の発端はゼウスの思慮によるもので、人口調節のためとも神の名声を高めるためとも伝えられる。プリアモス王の後ヘカベーは、息子パリス（アレクサンドロス）を生むとき「自分が燃える木を生み、それが燃え広がってイリオスが焼け落ちる」という夢を見た。この夢の通り、パリスはイリオスにとって災厄の種となった。パリスは、ヘーラー、アテーナー、アプロディーテーの三女神の美の競合、いわゆるパリスの審判によりアプロディーテーからスパルタ王メネラーオスの妻ヘレネー



イーリオスの陥落

を奪って妻とすることを約された。彼はスパルタからヘレネーを奪ったため、メネラーオスは直ちにトロイアにヘレネーを帰すよう求めた。しかし交渉は決裂、メネラーオスは兄アガメムノーンとともにトロイア攻略を画策した。

アガメムノーンを総大将としたアカイア軍（ギリシア勢）はイリオスに上陸、プリアモス王の王子ヘクトールを事実上の総大将としたイリオス軍と衝突した。多大な犠牲を出しながら戦争は10年間続き、アカイア軍の間には次第に厭戦気分が蔓延しはじめた。しかし、アカイア軍の将オデュッセウスは一計を案じ（一説には女神アテーナーが考えて）、エペイオスに木馬を造らせた。この、トロイアの木馬の詭計によってイリオスは一夜のうちに陥落した。陥落したイリオスから逃げ出すことができたのは、アイネイアースなど少数の者たちだけだった。

イリオス遺跡

シュリーマンによる発掘

ハインリヒ・シュリーマンによって発掘が行われるまで、イリアスは神話上の架空都市にすぎないというのが一般の通念であった。

このような常識に対し、シュリーマンは自著『古代への情熱』で、幼いころにイリアスの子供向けの物語を読み、イリアスは実際に起きた出来事をもとにした物語だと考えて発掘を決意し、資金を集めるために商人になったと述べている。

1868年、シュリーマンはトロイアのあった場所としてダーダネルス海峡西端のチャナッカレ近郊にあるヒッサリクの丘(en)に見当をつけた。アキレウスがヘクトールを追回することができるような場所、近くにイリアスに書かれた川（スカマンドロス河）があるような場所が他にないというのが彼の説明である。

1870年、シュリーマンは、私財を投じてトロイアの発掘を開始。この発掘には既に功績を挙げたオリンピア発掘隊もかかわっている。シュリーマンの狙いは正しく、曲輪に囲まれた遺跡を発掘した。ヒッサリクの丘の遺構は複数の層から成っており、シュリーマンは火災の跡があった第II層をトロイアだとした。しかし、後の研究の結果、この層はトロイア戦争があったとされる時代よりも前の時代のものであった。

シュリーマンの発掘が学会で認められるには時間がかかった。当時の常識に反している上に、シュリーマンがまったくの素人だったからである。確かにシュリーマンの間違った推定と発掘により、

世界遺産

トロイの考古遺跡 (トルコ)



トロイの考古遺跡

英名	Archaeological Site of Troy
仏名	Site archéologique de Troie
登録区分	文化遺産
登録基準	(2),(3),(6)
登録年	1998年
公式サイト	世界遺産センター (https://whc.unesco.org/en/list/849/) (英語)

地図

遺跡の考古学的価値は大きく傷ついていた。しかし、当時は現代的な意味での考古学は未整備な状況であった。

- 1882年からドイツの考古学者ウィルヘルム・デルプフェルトが発掘に参加。
- 8年後の1890年、トロイ第7a市、メガロン（ギリシア建築の宮殿）跡を発掘、第7層がホメロスのトロイと判定した。
- 1896年2月26日、シュリーマン死去、デルプフェルトは仕事を続ける。
- 1893年～94年、デルプフェルトは第7市の要塞を発掘、ホメーロス『イーリアス』のトロイを確証した。



イリオス遺跡の構成



イリオス遺跡からの眺め



Troy IXでオデオン、紀元前124年

現在までの調査によると、イリオスの遺跡は9層から成り、シュリーマンが『イーリアス』当時のトロイアのものだとして第II層Gは、紀元前2500年から紀元前2200年のものだということがわかった。第I層、すなわち最初の集落は紀元前3000年頃に始まっており、初期青銅器時代に分類される。第II層は、エーゲ海交易によって栄えたと考えられており、トロイア文化ともいべき独自の文化を持っていた。城壁は切石の下部構造を持ち、入り口は城壁を跨ぐ塔によって防衛されている。しかし、その後の第III層から第V層は繰り返し破壊されており、発展状況は認められない。

紀元前1800年から紀元前1300年に至る第VI層において、イリオスは再び活発に活動を始めている。『イーリアス』の時代とされるものは紀元前1200年ころの第VII層Aだったが、これはシュリーマンの発掘によって大きく削られてしまったため、ほとんど何も残っていない。この時期に規模は拡張されているが、それでも曲輪の直径は140m程度で、都市機能はかなり矮小であると言える。従って、イリオス遺跡は都市というよりは城塞である（ただし、周辺一帯の大規模な発掘によって、曲輪の外側に都市機能が認められる可能性はある）。第VII層Aはすぐに崩壊し、後に貧弱な第VII層Bが続いていた。その後第VIII層、第IX層が続くが、これらはギリシア人・ローマ人による

町の遺構である。

トロイア戦争の時代を、ヘロドトスは紀元前1250年、エラトステネスは紀元前1184年、Dourisは紀元前1334年と推定した。トロイア戦争時代と推定される第VII層の発掘では、陶磁器の様式から、紀元前1275年から紀元前1240年と推定されている。

シュリーマンの発掘した遺跡がトロイア戦争の舞台として登場する古代都市イリオスであるか否かは議論のわかれるところである。ホメロスの『イーリアス』には複数の都市に関する伝承が混合している可能性が指摘されており、その複数の都市の中に、シュリーマンが発掘したこのトロイア遺跡が含まれているということについては概ね合意が得られている。しかし、ホメロスの『イーリアス』それ自体に考古学的事実と符合しない部分があり、また、最も重要な証拠となるべき第VII層の大部分がシュリーマンの発掘によって消失しているので、イリオス遺跡が伝説上のトロイアであるという決定的な証拠はない。ホメロスの伝承が全く架空の伝承とする立場もないわけではない。

とは言え、この遺跡の発掘が考古学の発展に与えた影響は大きく、そういった意味からもユネスコの世界遺産に登録されている。

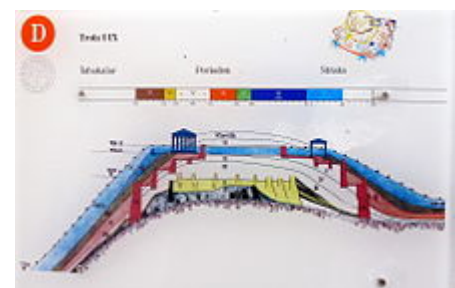
ヒッタイトの記録によるイリオスとトロイア

紀元前13世紀中ごろのヒッタイト王トウトハリヤ4世時代のヒッタイト語史料に、アナトリア半島西岸アスワ地方の町としてタルウィサが登場する。これはギリシア語史料のトロイアに相当する可能性が示唆されている。また、同史料にウィルサ王アラクサンドゥスが登場する。これもそれぞれギリシア語史料のイリオスとアレクサンドロスに相当する可能性が示唆されている。

トウトハリヤ4世の治世はヒッサリク遺跡の第VII層Aの時代と一致しており、パリスの別名がアレクサンドロスであったことが知られている。このため、この史料の記録はギリシア史料によるトロイア戦争となんらかの関係があるのではないかと推測されている。



イーリオス（トロイア）



断面図

20世紀の発掘調査

- 1932年～38年 シンシナティ大学の考古学班が発掘を再開。
- 1938年 第二次世界大戦の為に中断。
- 1950年 シンシナティ大学の調査結果発表、46層位が確認された。
- 1990年 シンシナティ大学、ドイツ・トルコの考古学者と共に発掘・整備。

世界遺産

イリオスの遺跡は、1998年、「トロイの考古遺跡」としてユネスコの世界遺産（文化遺産）に登録された。

登録基準

この世界遺産は世界遺産登録基準における以下の基準を満たしたと見なされ、登録がなされた（以下の基準は世界遺産センター公表の登録基準 (<https://whc.unesco.org/en/criteria>)からの翻訳、引用である）。

- (2) ある期間を通じてまたはある文化圏において、建築、技術、記念碑的芸術、都市計画、景観デザインの発展に関し、人類の価値の重要な交流を示すもの。
- (3) 現存するまたは消滅した文化的伝統または文明の、唯一のまたは少なくとも稀な証拠。
- (6) 顕著で普遍的な意義を有する出来事、現存する伝統、思想、信仰または芸術的、文学的作品と直接にまたは明白に関連するもの（この基準は他の基準と組み合わせて用いるのが望ましいと世界遺産委員会は考えている）。

脚注

参考文献

- Henry George Liddell, Robert Scott, *Greek-English Lexicon*, new edition, Oxford Univ Pr.

関連項目

- トロイア戦争
- イーリアス
- オデュッセイア
- ハインリヒ・シュリーマン
- プリアモスの宝

「<https://ja.wikipedia.org/w/index.php?title=イリオス&oldid=72888030>」から取得

最終更新 2019年5月26日 (日) 10:15（日時は個人設定で未設定ならばUTC）。

テキストはクリエイティブ・コモンズ 表示-継承ライセンスの下で利用可能です。追加の条件が適用される場合があります。詳細は[利用規約](#)を参照してください。